応用生態工学会ニュースレター

Ecology and Civil Engineering Society（ECESJ）

No.46

2009（平成 21）年 12 月 18 日（金）発行

〔発行所〕　応用生態工学会事務局　〒102-0083　東京都千代田区麹町 4-7-5　麹町ロイヤルビル 405 号室

TEL:03-5216-8401 FAX:03-5216-8520　E-mail: eces-manager@ecesj.com　HP：http://www.ecesj.com/

〔発行者〕　応用生態工学会（編集責任者：幹事長　藤田光一，事務局長　仮谷伏竜）

1　はじめに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

2　会長挨拶・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

3　第 13 回大会報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

3.1　第 13 回総会報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

3.2　埼玉大会報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

4　理事会・幹事会報告・・・・・・・・・・・・・・ 7

5　委員会報告 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

5.1　将来構想委員会・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

5.2　普及委員会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

6　行事開催報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10

5.1　広島シンポジウム開催報告・・・・・・・・・・ 10

5.2　松山現地勉強会開催報告・・・・・・・・・・・・ 11

5.3　第 8 回北陸現地ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟ in 福井・・・・・ 13

7　会長の瑞宝重光章 受章について・・・ 16

8　編集後記：事務局から・・・・・・・・・・・・ 16

1　はじめに

今回のニュースレターでは，平成２１年９月に埼玉県浦和市で開催した第 13 回総会と盛況のうちに終えた第 13 回埼玉大会の報告のほか，各地域研究会で実施したシンポジウムなどの活発な活動を紹介しています．第 13 回総会では，役員改選により第 7 期役員（34 名・任期 2 年）が選出されました．総会報告は，学会誌「応用生態工学 V01.12-2」学会記事の中で決議事項を詳しく紹介しておりますので，併せてご覧ください．

2　会長挨拶

第 7 期会長に選出されました近藤徹でございます．尊敬する山岸前会長の後任として，ご指名を受けました．大変，責任の重さを痛感しております．

山岸前会長は，設立の頃から応用生態工学の必要性を痛感されてきた方で，土木工学側もその必要性を痛感して生物学の学識者の方からのご指導を受けながら，当学会の発足に至ることができました．

私自身は，この学会で籠を担ぐ方と考えておりましたが，図らずも今回会長のご指名を受けまして，責任をどう果たしていくか悩んでおるところでございます．

総会審議の中にもありましたように，来年の COP10 へ向けて我々学会・日本がどのように世界に向かってメッセージを発信していくことができるか，また次期中期計画等の策定について会員の皆様の意見をどう集約し実行して行けるのか，その点，私を含め，第 7 期役員の責任かと存じております．

昨今の他学会の状況をみると，会員の減少に悩みながら経営に大変苦しんでいる所が多く見受けられます．応用生態工学会は，幸いにして，学会の目標である「人と生物の共存」「生物多様性の保全」「健全な生態系の持続」というテーマが，現在の学問の状況や社会情勢に合致していた所以か，会員が多少なりとも増加傾向にあります．この会員数が減少には至ってない，漸増の傾向にあると

いうのは，当学会の目標に対する「皆様の期待」があるのではないかと思いますが，昨今の政治・社会情勢は，今後，行政，あるいは，それを取り巻く建設分野にもかなり厳しい状況になるかと思います．

それだけに我々の目標を高らかに掲げながら，土木工学と生態工学との融和によって新しい研究領域を拡大していきたいということを，切に感じております．

発足から十数年経った訳ですが，更にこれに磨きをかけて，次代に向けて良い国，良い自然環境を維持・保全していくために，皆さんと力を合わせていきたいと考えておりますので，どうか宜しくご支援の程をお願い致します．

3　第 13 回大会報告

3.1　第 13 回総会報告

応用生態工学会 事務局長　仮谷 伏竜

平成 21 年 9 月 26 日(土)　12：30～13：25 に第 13 回総会を開催しました．開催にあたり，木村達司氏（(株)建設技術研究所 上席技師長）が総会議長に選出され，議事進行を進めました．以下に主要な事項について報告します．

(1)　議事次第

12:15　開場(受付開始)
12:30　1. 開会　［司会：事務局長　仮谷伏竜］
　　2. 総会議長選出
　　3. 会長挨拶　［会　長：山岸　哲］
12:40　4. 議事開始　［議　長：木村達司］
　1）報告事項　［幹事長：江崎保男］
　　平成 20 年度事業報告　［幹事長：江崎保男］
　　(1)　一般経過報告
　　(2)　会員状況報告
　　(3)　総会・理事会・幹事会・委員会報告
　　(4)　会誌「応用生態工学」編集報告
　　(5)　2008 年度（平成 20 年度）事業報告
　2）審議事項
　　(1) 平成 20 年度決算・監査報告
　　①　決算報告　［幹事長：江崎保男］
　　②　監査報告　［監　事：小林　光］
　　(2) 平成 21 年度事業実施状況・収支見込み　［幹事長：江崎保男］
　　(3) 平成 22 年度事業計画案［幹事長：江崎保男］
　　(4) 平成 22 年度予算案　［幹事長：江崎保男］
　　(5) 役員の改選　［幹事長：江崎保男］
　　(6) 名誉会員の推薦　［幹事長：江崎保男］
　　(7) 英文誌 LEE 編集委員会報告［理事：中村太士］
13:25　5. 総会終了

(2)　報告事項

平成 20 年度の活動報告として，一般経過，会員状況，実施行事，理事会・委員会等の会議，会誌編集状況などについての報告が江崎幹事長から行われました．

(3)　決議事項

平成 20 年度の事業報告と決算報告が江崎幹事長から，監査報告が小林監事から行われ，承認されました．続いて平成 21 年度事業実施状況・収支見込みについて報告を行い，平成 22 年度の事業計画案および予算案について幹事長から説明が行われ，原案どおり承認・可決されました．

規約に基づき，2 年ごとの役員の改選が行われ，第 7 期役員が選出されました(次頁に記載)．

また，廣瀬利雄先生が名誉会員として理事会より推薦され，総会出席者の総意により承認されました．

○　廣瀬 利雄先生（名誉会員）

①現職：(財) ダム水源地環境整備センター　顧問
②専門：土木工学（土木環境システム）
③功績

廣瀬利雄氏は，「応用生態工学序説, 1997」を監修された後，本学会（研究会）発起人として会の立ち上げに尽力され，また，発足後は副会長を２期４年，会長を２期４年務め，「自然再生への挑戦, 2007」を監修されるなど，応用生態工学の発展に大きく貢献されました．

応用生態工学会　第７期役員

1.会長：近藤　徹　（(財) 水資源協会 理事長）

2.副会長３名　＝50 音順＝
池淵　周一　（京都大学 名誉教授）
谷田　一三　（大阪府立大学 教授）
森下　郁子　（(社)淡水生物研究所 所長）

3.理事 14 名　＝50 音順＝
井上　忠佳　（(株) 創建　常勤技術顧問）
江崎　保男　（兵庫県立大学 教授）
大島　一哉　（(株) 建設技術研究所 代表取締役社長）
風間　ふたば　（山梨大学 教授）
熊野　可文　（利根川歴史研究会 事務局長）
小林　光　（(財) 自然環境研究センター 上級研究員）
島谷　幸宏　（九州大学大学院 教授）
関根　雅彦　（山口大学大学院 教授）
玉井　信行　（金沢学院大学大学院 教授）
辻本　哲郎　（名古屋大学大学院 教授）
中村　太士　（北海道大学大学院 教授）
松井　正文　（京都大学 教授）
山本　晃一　（(財) 河川環境管理財団 河川環境総合研究所長）
渡辺　和足　（(財) ダム水源地環境整備センター 理事長）

4.幹事長　：藤田　光一　（国土交通省国土技術政策総合研究所 河川研究部　流域管理研究官）

5.副幹事長：西　浩司　（いであ(株)国土環境研究所 自然環境保全グループ長）

6. 幹事 12 名　＝50 音順＝
浅見　和弘　（応用地質(株) 応用生態工学研究所長）
東　信行　（弘前大学 准教授）
河口　洋一　（徳島大学 准教授）
五味　高志　（東京農工大学 准教授）
坂之井　和之（(財) リバーフロント整備センター 水辺･まちづくりグループ長）
清水　義彦　（群馬大学 教授）
関島　恒夫　（新潟大学 准教授）
高橋　剛一郎　（富山県立大学 准教授）
高村　典子　（(独) 国立環境研究所 生態系影響評価研究室長）
武藤　裕則　（京都大学 准教授）
安田　吾郎　（国土交通省河川局河川環境課流域治水室長）
山本　民次　（広島大学 教授）

7.監事２名　＝50 音順＝
間宮　清　（応用地質(株)　取締役会長）
渡辺　晋　（いであ(株)　国土環境研究所　所長代理）

3.2　埼玉大会報告

埼玉大会副実行委員長　西 浩司

○はじめに

第１３回の応用生態工学会大会は，2009 年 9 月 25 日～27 日の 3 日間に渡り，さいたま市の埼玉会館で開催され，405 名の参加がありました．今年の大会は，第 10 回記念大会以来の関東地域での開催であり，名古屋大会，福岡での ELR が盛況であったため，実行委員ではどのように大会を盛り上げるかについて，浅枝委員長（埼玉大学）を中心に検討し，いくつかの新しい試みを実行しました．また，大会プログラムの１つとして 9 月 28 日に荒川流域をテーマに３コースでのエクスカーションを実施しました．ここでは大会開催までの主な経緯と当日の様子などをご報告します．

○応用生態工学会東京のメンバーを中心に準備を進めました

埼玉大会を開催するにあたって，まず，応用生態工学会東京のメンバーが 2008 年 10 月 17 日に埼玉大学で会合を行い，日程，会場，実行委員会の構成，河川整備基金の申請などの大まかな案を検討しました．これをもとに 2009 年 1 月 18 日に第１回実行委員会を開催して，会場，受付，分科会，エクスカーションなどの役割分担を決定しました．今回の実行委員会には，過去の東京の大会で実行委員を経験したコンサルタント会社の方が多く参加したことから，その後の事務的な準備は各担当に安心してお任せすることができました．公的な施設である埼玉会館は開場時間，機材の使用などにおいていくつか制限事項がありましたが，これも各担当・各社の協力を得て，なんとかプログラム等を調整することができました．

また，英語セッションや分科会などの新しい企画については，学会の交流委員会やパートナーシップ委員会と連携して準備を進めました．公開シンポジウムについても 4 月頃から新技術というキーワードを軸に，内容や講演者・パネ

ラーなどの具体的な調整を行い，最終的には 9 月 9 日に顔合せ会を開催して内容を詰めることができました.

○研究発表以外の企画も盛りだくさん

今回の研究発表は，口頭発表が 62 編（日本語 25 編，英語 37 編），ポスター発表 51 編と単独開催の大会では過去最多となりました．特に英語のセッションは応用生態工学会では初めての試みでした．昨年の ELR を除けば口頭発表を複数会場で並行して行なったのも初めてです．このセッションでは国内の研究者や留学生に加えて，これまで日韓交流の中心メンバーであった Woo さんらが発表され，最終日の最後まで熱い議論が交わされました.

ポスター発表は，例年通り一般投票と幹事会メンバー等による審査が実施され，8 編の発表がポスター賞に選ばれました．この受賞したポスターを最終日まで会場に掲示することも初めて行ないました．また，研究発表のポスターと並べて埼玉県の河川管理の状況を解説したパネル展示も行ないました.

ポスター賞

ポスター賞の審査は，ポスターセッションへの参加者からの投票と幹事を中心とした８名の選考委員会（山本晃一委員長）の投票により，一般投票部門賞・選考委員会賞の計 8 編が選出・表彰されました.

投票理由の中では，今までに無い切り口，新たな知見など「新たな視点」に関するものと，ポスターの図表表現，説明の適確さなど「発表の明確さ」等の評価が約半分を占めました．その他の理由では，今後の実用性や，自身の研究への参考･刺激になるという意見が多く，また，研究の将来性へ期待しての評価も１割ほどありました.

【一般投票部門賞】

●P6-14 住民参加による多自然川づくりの取組み ～上西郷川を事例として～

発表者：林博徳（九州大学大学院工学府），島谷幸宏（九州大学大学院）

講評：実践的で，すぐにでも現場に活かせるという評価とともに，今後の川づくりに必ず必要となる分野なので，さらなる進展を期待する意見が多かった.

●P7-3 福岡県日本海側の砂浜海岸，入江，河川感潮域の水際におけるハゼ類の出現パターン

発表者：乾隆帝（九州大学大学院農学研究院），江口勝久（佐賀県玄海水産振興センター），鬼倉徳雄（九州大学大学院農学研究院），西田高志（(株)日本紙パルプ研究所），川岸基能（九州大学大学院農学研究院），中谷祐也（同），及川信（同）

講評：汽水から海岸の指標種としてのハゼ類の有効性を明らかにした点が評価された．調査努力に敬意を表すという意見もあった.

●P7-4 橋脚による下流域平瀬の河床改変が底生魚密度に及ぼす影響

発表者：小野田幸生（京都大学生態学研究センター），丸山敦（龍谷大学理工学部環境ソリューション工学科），遊磨正秀（同），神松幸弘（総合地球環境学研究所）

講評：明確な問題意識や仮説の設定がなされている．橋脚の大部分を占める道路分野からみて新しい環境対策の切り口となっている.

●P7-8 表流水枯渇時における河床間隙域の魚類による利用 - ヒナイシドジョウでの事例 -

発表者：川西亮太（愛媛大学大学院理工学研究科），井上幹生（同），三宅洋（同）

講評：「水の無い場所で魚を調査する」という視点の斬新さを評価する意見が多かった.

【選考委員会賞】

●P3-2 ため池の連結の影響　－池の重なりがもたらす多様性・群集構造－

発表者：赤坂宗光（(独)国立環境研究所），高村典子（同）

講評：ため池の保全対策を具体的に示す指針となる研究成果であり，ポスターも非常にわかりやすいとの意見が多かった．

●P4-2 ダム湖におけるオオクチバスの低密度管理手法の検討

発表者：笹田直樹（(株)ウエスコ），芹沢英一郎（同），佐貫方城（(独)土木研究所），吉田裕之（(株)ウエスコ），中井克樹(滋賀県立琵琶湖博物館)，大槻清人(国土交通省中国地方整備局苫田ダム管理所)，小坂田堅（同）

講評：オオクチバス駆除のポイントや，どんな対処方法が有効かについてよく検討されていた．さらに，人工産卵床を用いて実際の取り組みが進められていること，縮小模型を持ち込んで実際の現場が見えることがプラス評価であった．この方法が有効であるならば，他の地域への展開も見込まれるので，実用性を高める検討を進めてほしい．

●P6-11 斐伊川水系におけるコアマモ群落の遺伝的多様性と集団構造の評価

発表者：程木義邦（京都大学生態学研究センター），大林夏湖（同），宮本康（鳥取県環境衛生研究所），田中法生（国立科学博物館），國井秀伸（島根大学汽水域研究センター）

講評：斐伊川水系中海のコアマモ群落の分布に関して，遺伝的多様性とその流動性を適確に捉え，保全対策としての流動性回復を明確に示していることが評価ポイントであった．ポスターもビジュアルな表現でわかりやすい．

●P7-10 アマゴの微生息場所評価におけるバイオエナジェティックモデルの有用性の検討

発表者：小寺信義（愛媛大学大学院理工学研究科），井上幹生（同）

講評：生息環境として，見かけの生息環境の視点ではなく，魚類の採餌環境の説明モデルに着目して生息環境を捉えた切り口と，それをフィールドで検証して有用性を明らかにした点で，現場でのモデルの応用性が非常に高いと評価できる．今後，このモデルを用いて，実際にどのような環境整備を行うと，魚類の生息環境にとって高い効果が得られるかという研究に発展させてほしい．

公開シンポジウム

今大会の公開シンポジウムは「応用生態工学のフロンティアー新技術の開発と持続的な発展ー」と題して大会２日目に開催しました．

招待講演，事例報告の後パネルディスカッションを行ない，応用生態工学における新しい技術や，それを担う産官学の連携，業務発注の方法など非常に幅広い議論が展開されました．これらは，今後の学会の役割を考える上でも重要な視点であり，引き続きさまざまな機会に議論されることが望まれます．

同じく大会２日目には，パートナーシップ委員会主催の分科会「保全としての放流」を開催しました．会場等の都合で口頭発表と並行して開催せざるを得なかったため，口頭発表のプログラムを調整し，内容（魚類関係）があまり重複しないようにしました．

パートナーシップ委員会主催「保全としての放流」

このほか，初日には「応用生態工学会若手の会」と「COP10 ワーキンググループ」の自由集会が，３日目には野草サミット実行委員会・

(財)埼玉県生態系保護協会による自由集会「野草サミット」が開催されました．それぞれ多数の参加があり，自由集会も応用生態工学会の大会において魅力的な企画になってきたと言えると思います．

○充実したエクスカーションを楽しみました

エクスカーションは，荒川をフィールドとして，山地環境コース・台地～低地環境コース・汽水環境コースと上・中・下流の３箇所を設定し，参加者に自由に選択いただきました．申し込み人数がなかなか増えず気をもんだ時期もありましたが，最終的には多くの方（56 名）に参加いただき，充実した見学会となりました．

山地環境コースでは，浦山ダムのバイパス水路，二瀬ダムの土砂還元，滝沢ダムでの原石山の植生復元などの応用生態工学的な事例の現場を見学し，意見交換を行ないました．

滝沢ダムの原石山植生復元を見学

台地～低地環境コースでは，まず，むさしの里山での保全活動（放棄水田の生態系の再生や人工林での下草管理と生物多様性の調査など）の現場を見学し，次いで北本自然観察館で，地域と一体となった雑木林・湿地の保全活動について説明を受けました．また，荒川の太郎右衛門自然再生地区，特に河畔林や水際草本類の保全，生物の移動性の回復等による中池・上池の再生状況を見学しました．

里山の管理状況を見学

汽水環境コースでは，荒川知水資料館，岩淵水門や荒川・隅田川分派点，北区子供の水辺（自然再生事業）等を見学したのち，荒川下流河川事務所が所有する船に乗船し，荒川を下って隅田川を上りました．これにより，水際の環境を川の中からつぶさに見ることができました．また，途中，スーパー堤防や荒川ロックゲートの操作室なども見学しました．

荒川を船で見学

なお，今回のエクスカーションでは，国土交通省関東地方整備局，二瀬ダム管理所，荒川上流河川事務所，荒川下流河川事務所，（独）水資源機構，荒川ダム総合管理所，埼玉県生態系保護協会，ＮＰＯ法人むさしの里山研究会に現地案内などご協力をいただきました．

○反省と今後に向けて

今回の大会では，例によって発表データやレジメの到着が遅れたりして気をもむこともありましたが，事故や大きなトラブル等がなかった

ということで，実行委員としてほっとしているところです．主な反省点は，複数のプログラムが同時並行となり，大会参加者に全部に参加いただくことが不可能だったことです．日程を延長することも限界があり，調整が難しいところだと思いました．しかし，英語セッションなどの新しい試みは概ね参加者から一定の評価をいただいたようで，今後の大会でも一層盛り上げていただければありがたいと思います．

最後になりましたが，浅枝委員長をはじめ実行委員の皆さん，大会に参加・協力いただいたすべての方にこの場を借りて深く感謝します．ありがとうございました．

英語口頭発表の座長を務める浅枝大会実行委員長

2009年９月28日（月）埼玉新聞　P17（社会面）

応用生態工学会が，埼玉で初の研究発表

きょうまで

生態系への影響を配慮した土木事業を目指す応用生態工学会（東京都千代田区，会員約1200人）の第13回総会・研究発表会が25日から，さいたま市の埼玉会館をメーン会場に始まった。大会3日目の27日は，県生態系保護協会などによる「野草サミット」が開かれ，県内の野草保護に向けた取り組みが紹介されたほか，全国各地の生態系保全にかかわる研究事例が発表された。埼玉で大会を開催するのは初めて。

26日の公開シンポジウムでは，行政のシンクタンクとしての役割を担う「コンサルタント」に焦点を当て，若者にとって魅力のある業界の育成や，現場に役立つ新技術の開発について議論を展開した。大会最終日の28日はエクスカーション（体験型の見学会）を行い，荒川を3コースに分けて回る。

（三宅芳樹）

埼玉新聞（社会面）の埼玉大会に関する記事

4　理事会・幹事会報告

ニュースレターNo. 45 発行後，第 40 回幹事会・第 49 回理事会，第 7 期合同役員会（第 41 回幹事会・第 50 回理事会）が開催されました．理事会での報告及び検討内容を主体として報告します．

役員会開催状況
第 40 回幹事会 平成 21 年 9 月 26 日(土)11：30～12：00
第 49 回理事会 平成 21 年 9 月 26 日(土)12：00～12：30
第 7 期合同役員会（第 50 回理事会，第 41 回幹事会） 平成 21 年 9 月 26 日(土)17：20～17：50

第４９回理事会

・日時：平成 21 年 9 月 26 日（土）12:00～12:30

・場所：埼玉会館　３Ｂ（ぶな）会議室

・出席者：山岸会長，近藤副会長，辻本副会長，荒井理事，沖野理事，竹村理事，中村理事，古川理事，間宮理事，森理事，山本理事，江崎幹事長
仮谷事務局長，関根(事務局次長)

各委員会からの報告，幹事会からの提案を受け，以下の審議・承認を行った．

(1)　将来構想委員会関連

・幹事会は，委員会の担当幹事の役割について検討し，幹事あるいは幹事会の主体性を発揮して活動するように討議を行うこと．

・中期計画（2004 年 6 月策定）の事後評価と，2010 年から 4 年間の次期中期計画案の策定を将来構想委員会･幹事会で進めていくこと．

・各委員会規程（案）を幹事会で横断的に検討し，理事会の承認を受けること．

・会誌編集委員会については，査読体制を十分検討し，専門編集委員制度の廃止を検討して，委員会のスリム化を検討すること．

・事務局の負担が大きいため，その軽減策や常駐雇用者の導入等の検討を幹事会で進めること．

(2)　会誌編集委員会関連

・会誌編集委員の任期は，平成 22 年 3 月末までであり，次期委員長・副委員長候補を委員会で調整し，候補(案)を理事会に諮っていくこと．

・現在の専門編集委員は多忙のため査読に対応できない面がある．専門編集委員を廃止し，編集委員会委員を増やしていくべきとの意見があった．

(3)　パートナーシップ委員会・普及委員会関連

・地域研究会の活動に対する助成として，助成金制度の創設に向けた検討資料を第 7 期役員会に諮っていく事が委員会より報告された.

・パートナーシップ委員会と普及委員会の統合について了承された.

・「応用生態工学会 那覇」の設置と，普及委員（宮良 工氏）への委嘱が承認された.

・委員会名称を「普及・連携委員会」とすることについては，第 7 期役員会での継続審議とする.

(4)　交流委員会関連

・大会時の口頭セッションについては，交流委員会で企画し，大会実行委員会の中で募集・運営を行うこととする.

・海外派遣については，今年度の応募が 2 件であったため，助成金額を上げて 1 名に助成するなど，魅力を高めていく必要があるとの意見があった.

・委員会名称は，国際交流委員会とすることで了承を得た.

・幹事会より，「交流委員会の役割には，他分野・業種間との交流も含まれる」との意見があったことを報告した.

(5)　情報サービス委員会関連

・委員会より，次期委員長として萱場幹事が推薦され，承認を得た.

・委員会メンバーは，3 名程度となるようスリム化・調整すること.

・情報委員会で次期活動として企画していたものは課題として残していくが，活動内容について第 7 期幹事会で討議し，委員会で実施できるようフィードバックすること.

・委員会の役割は，地域の情報収集とそのアナウンスが主体である. 今後, COP10 対応 WG からのホームページ活用要望があるので対応していくこと.

(6)　事務局体制

・事務局次長（非常勤）として, 関根秀明氏（(株)建設技術研究所）が就任することについて承認された.

・事務局の役割・作業が過剰となっており，今後，軽減方策について委員会・幹事会で検討していくようにとの意見が出た.

(7)　ICLEE の協賛団体としての URBIO2010 への学会参加について

鎌田幹事より提案された「URBIO2010 への ICLEE の協賛」については，構成団体の一員である当学会も協賛に賛成することで承認された.

(8)　河川生態学術研究会の一部を学会所属委員会とすることについて

幹事会より，河川生態学術研究会の一部を学会所属委員会としていくことについて提案があり, 第 7 期役員会で検討していくこととなった.

第 7 期合同役員会（第 50 回理事会・第 41 回幹事会）

・日時：平成 21 年 9 月 26 日（土）17:20～17:50

・場所：埼玉会館　３Ｂ（ぶな）会議室

・出席：近藤会長，谷田副会長，池淵副会長，森下副会長，井上理事，江崎理事，風間理事，熊野理事，小林理事，関根雅彦理事，辻本理事，中村理事，山本晃一理事，渡辺和足理事，間宮監事，渡辺晋監事，藤田幹事長，西副幹事長，浅見幹事，東幹事，河口幹事，坂之井幹事，清水幹事，関島幹事，高村幹事，安田幹事，山本民次幹事，仮谷事務局長，関根事務局次長

1　報告事項

第 49 回理事の審議結果を報告し，第 7 期役員会で継続して審議していく事項について報告した.

2　審議・提案事項

(1)　会長職務代行者の決定について

近藤会長より，会長職務代行者として谷田副会長が推薦され，理事会の承認を得た.

(2)　副幹事の選出について

藤田幹事長より，副幹事長として西幹事が推薦され，幹事会・理事会の承認を得た.

(3)　河川生態学術研究会の組織化について

幹事会より，河川生態学術研究会の一部を学会所属の委員会組織としていく点について説明があり，第 7 期幹事会で位置付けを検討し，原案を理事会に諮っていくこととなった.

(4)　COP10 対応 WG のホームページ活用について

辻本理事より，COP10 対応 WG の検討予定について説明があり，今後学会ホームページを活用していく際に，情報サービス委員会の協力を得て推進していくことについて了承された.

5　委員会報告

5.1　将来構想委員会

・日時：平成 21 年 9 月 25 日（金）14:00～15:30

・場所：砂防会館　３Ｆ会議室

・出席者：谷田委員長，竹門委員，中村委員，西委員，萱場幹事，仮谷事務局長

(1)　各委員会・事務局体制等の報告

・学会設立当初は，各幹事が委員会の運営まで担っていたが，現在は各委員会の担当幹事の役割が明瞭でない．幹事の役割を明確にすることを，役員会に諮ることとする.

・専門編集委員を含む会誌編集委員会の規模が大きくなっているが，専門編集委員の査読体制が有効に機能していない面もある．査読体制を十分検討し，専門編集委員制度の廃止を含めて，委員会のスリム化を検討する必要がある.

・各委員会規程については，期限を決めて検討していくことを役員会に具申する.

・事務局では，役員会・各委員会の資料・議事録作成を行い，会誌記事・ニュースレター発行，会員管理等の事務を行っている．将来的に事務局体制を維持していくために，事務局の負担軽減策や常駐雇用者の導入等の検討を進める必要があることを役員会に具申する.

(2)　次期中期計画について

・前中期計画（2004～2007 年度）の事後評価は，将来構想委員会で概ね実施することが可能である．事後評価に基づき，次期中期計画案（2010～2013 年度）を策定していくこととする.

5.2　普及委員会

・日時：平成 21 年 9 月 25 日（金）15:30～19:30

・会場：埼玉会館　３Ｃ会議室（けやき）

・出席者：竹門委員長，岩瀬委員，橋本委員，久保市委員，矢部委員，佐渡委員，澤委員，中村委員，厨子委員，川越委員，宮良（委員），中井委員（パートナーシップ委員会），関根幹事，星野幹事，仮谷事務局長

(1)　平成 21 年度活動報告

「応用生態工学 那覇」の設置と宮良工氏（(財) 沖縄県環境科学センター）の普及委員（地域責任者）の就任について，理事会に諮ることとした.

また，各地域研究会より，これまでの活動，今後の予定について報告した.

(2)　審議事項

1)　パートナーシップ委員会との統合，今後の委員会の役割について

パートナーシップ委員会より，9 月 10 日に開催されたパートナーシップ委員会での討議事項と，統合後の活動について話し合った結果が報告された．今回の統合提案の背景として，パートナーシップ委員会の活動を十分周知・報告できていなかった側面があるものの，埼玉大会で開催する分科会「保全としての放流」でも，多くの地域活動と市民の参加があり，今後も市民連携に寄与する活動の重要性，継続の必要性について，パートナーシップ委員会総意の意見として報告された.

また，パートナーシップ委員会の「一般市民活動への協力を通じた普及・連携」と，「各地域の技術者への工学の普及」を目指す普及委員会は，ターゲットは異なるものの，応用生態工学の普及・連携という目的は同じであり，今後の活動においても当面は両方向で継続するこ

とが望ましいとの提案がなされ,両委員会の発展的統合を図る点について,確認・了承された.

統合する委員会名称は,「普及・連携委員会」と改称したいことを役員会に諮ることとし,「連携」の対象は,市民団体に限らず一般市民を含み広く活動していく点が確認された.

2)　H21 年度　フィールドシンポジウム実施体制について

年に一回,普及委員が一堂に会し実施する「フィールドシンポジウム」については,理事会審議により,本年度の旅費支給は承認されたものの,次年度以降については継続審議となっている.

普及委員会は年 2 回開催しているが,そのうちの 1 回をフィールドシンポジウム時に開催する等,今後検討していくこととなった.

普及委員会の企画するフィールドシンポジウムは,『民間コンサルタント技術者が多数参加している応用生態工学会において,現場で課題に直面している技術者が研究者と一緒に現場を体験することで問題解決のきっかけをつかむことや,現場技術者の疑問点から研究者が新たな研究テーマを考案・設定すること』を目的の一つとしている点が確認された.

3)　地域の活動資金（協賛金）確保について

各地のシンポジウムや現地ワークショップの企画・実施にあたって,他学会・協会では,助成金等の名目で地域活動への支援金が出されている場合が多い.応用生態工学会では,各地域の活動は独立採算を目指して実施しているものの,他学会等と共催してシンポジウム等を実施する場合の（他学会同等の）資金援助を行う仕組みが無いため,活動に必要な資金を助成金として支給できる制度の創設を幹事会・理事会に提案していくこととする.

4)　学会ポスターについて

これまで作成されてきた学会ポスター(原案)は,ポスターとして使用可能な写真に変更すること,活字が多く再考する必要があるため,事務局で再度デザインし,委員会で検討した上で理事会に諮ることとする.

6　行事開催報告

6.1　広島シンポジウム開催報告

応用生態工学会広島・江田島湾再生協議会
ジョイントシンポジウム
～太田川-広島湾流域圏の自然再生を考える～

○主催:応用生態工学会広島,江田島湾再生協議会
○共催:広島大学流域圏環境再生プロジェクト研究センター
○後援:国土交通省中国地方整備局,江田島市,広島大学

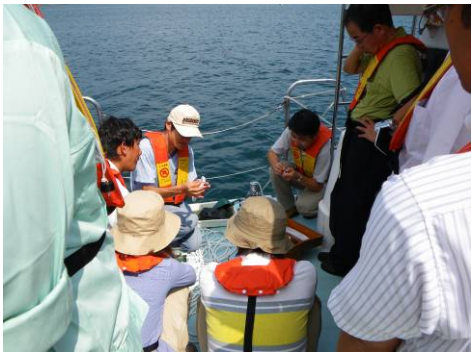
応用生態工学会　広島
若尾拓志（中電技術コンサルタント(株)）

応用生態工学会広島は,2009 年 8 月 21 日(金)～22 日(土)に,江田島湾再生協議会とジョイントシンポジウムを開催しました.中国地方での本学会のワークショップとしては,2004 年（広島　水系環境の保全と創造－自然再生に向けて－),2005 年(山口　森・川・海 共生プロジェクト－椹野川流域フォーラム－)に続いて 3 回目です.

当日の参加者は,現地見学会が16名(船の定員どおり),交流会が17名,シンポジウムは午前の部が48名,午後の部が68名でした.

以下に,シンポジウムの概要を紹介します.

初日の現場見学会は,全て船で移動しました.まずは宇品港(広島市)から江田島湾に入り,山本民次先生(広島大学大学院,本学会幹事,江田島湾再生協議会会長)の案内で,江田島湾のヘドロ堆積状況を観察しました.江田島湾はカキ養殖が盛んな閉鎖性海域で,近年は有害赤潮の発生や貧酸素水塊の出現が顕著になっています.



底泥の観察

続いて大柿自然環境体験学習交流館(環境館)へ向かい,見学および西原直久館長と意見交換をし

ました．この施設は廃校を活用した，宿泊も可能な江田島市所管の環境学習施設で，当日も地元の中学生が自主研究を行っていました．西原館長によると，広島県内に限らず，関西方面からの来館者もあるとのことでした．

環境館で記念撮影

2 日目は広島県情報プラザ多目的ホール（広島市）でシンポジウムを行いました．シンポジウムは午前を応用生態工学会広島シンポジウム，午後を江田島湾再生協議会シンポジウムと 2 部制にしました．応用生態工学会広島シンポジウムでは地元の建設コンサルタント等に勤める技術者から，瀬切れが河川生態系に及ぼす影響に関する研究，沿岸域環境モニタリング手法，浚渫跡地におけるアマモ場造成，閉鎖性海域における費用対効果の高い水環境改善対策の検討事例と，4 題の発表がありました．

午後は江田島湾再生協議会メンバーにより，江田島湾の実態を把握するための基礎研究（海水流動，物質循環，貧酸素水塊，物質循環に対する地下水の影響），江田島湾の護岸整備状況の紹介，1 日目の見学会でお世話になった環境館の活動紹介と，6 題の発表がありました．

シンポジウムの様子

最後になりましたが，本ジョイントシンポジウムの開催にあたっては多くの皆様にご協力を頂きました．厚く御礼申し上げます．

6.2　松山現地勉強会開催報告

「松山現地勉強会，－重信川の自然再生－」

川越　幸一（応用生態工学松山）

２００９年１０月１７日（土）に愛媛県松山市周辺において開催した「松山現地勉強会」について報告します

四国では，２００１年に開催した「現地ワークショップ in 松山」以来の応用生態工学会の催しです．前回は１５０人余の参加者を集めたワークショップでしたが，今回は，小規模な勉強会形式で行いました．参加者は２１名で，コンサルタント会社をはじめ，市民団体，大学関係者など多岐にわたり，しかも茨城，東京，名古屋など四国島外からも参加を頂きました．

今回のテーマは重信川の自然再生ということで，現在，重信川で行われている水と緑のネットワーク再生による自然再生箇所を見学・勉強することにしました．

現地見学は 12:30 から国土交通省松山河川国道事務所で受付の後，事務所のマイクロバスで以下の予定で再生箇所を見てまわりました．説明は中塚光氏（松山河川国道事務所）により行われました．

13：00～13：30　河口ヨシ原再生箇所の見学

河口のヨシ原再生箇所：中流部のツルヨシは増加中ですが河口のヨシは以前より減少しているためヨシ原の再生を行っています．

13：30～14：00　移動

14：00～15：00　松原泉再生箇所・広瀬霞再生箇所見学

松原泉再生箇所：過去に埋め立てられた泉を復元しています．

広瀬霞再生箇所：泉から流れ出た水が重信川へとつながる場所である霞の湿地環境を再生しています．

この両箇所では，三宅洋氏（愛媛大）からタモ

網を使いながら，生物の生息状況の説明を頂きました.

15：00～15：30　移動（松山河川国道事務所へ）

重信川を河口から上流へと廻り，３箇所の再生箇所を巡るコースでした．各再生箇所で，皆さん熱心に見学・質問されたため予定を３０分ほどオーバーしてしまいました．短い時間でしたが，充実した現地見学ができたようです.

河口ヨシ原再生箇所の見学の様子

広瀬霞の湿地再生箇所で説明する三宅氏

松原泉再生箇所での参加者集合写真

現地見学の後，松山河川国道事務所の会議室をお借りして自然再生の取り組みや重信川の現状についてお話を頂きました

話題１「重信川の現状と自然再生への取り組み」
中塚光氏（松山河川国道事務所）
話題２「重信川における河川生態系の現状と保全」
三宅洋氏（愛媛大学）

勉強会の様子

熱心な質疑応答の後，アンケートを頂き 17:30 過ぎに解散となりました. 参加者の皆さんからは，今後も重信川での勉強会をつづけて欲しいという意見や四万十川での開催を希望される意見が寄せられ今後の勉強会の指針としたいと思います.

今回は少人数での現地見学を中心とした会としました．大人数を集める会は華々しくて良いのですが，実際に現場に直面している人たちによる少人数の勉強会も必要と考えます.

今後も２０名程度で和気あいあいとしかも熱のある参加して良かったと思えるような勉強会を継続して行きたいと思います.

最後に，この勉強会に全面的協力頂きました国土交通省松山河川国道事務所をはじめ協力頂いた方々，参加して頂いた方々皆様に感謝の意を表して報告を締めさせて頂きます.

6.3　第８回北陸現地ワークショップ in 福井

応用生態工学会福井
森田弘樹（(株)サンワコン）

（１）はじめに

第８回北陸現地ワークショップは,「九頭竜川流域の多様性 ～つながりの保全・再生をめざして～」と題して 2009 年 10 月 30 日(金)～31 日(土)に福井県にて開催され，ワークショップ講演会は 253 名,現地見学会は 86 名のご参加を頂きました.

（２）ワークショップ講演会

ワークショップは実行委員長の金沢学院大学大学院玉井信行教授による開会挨拶で始まりました.

基調講演は，名古屋大学大学院教授の辻本哲郎教授による「応用生態工学 10 年の歩みと今後の展望・期待」でした．応用生態工学の設立時の背景と目標，これまでの成果とこれからの課題を，分かりやすく具体的で説得のある語りで話され，応用生態工学をこのワークショップで初めて聞いた参加者にも強い印象を与えました.

会場と基調講演の様子

講演１は，福井県立大学の田原大輔講師による「アラレガコの生活史と九頭竜川 ～アラレガコ伝統文化とは？～」でした．九頭竜川のアラレガコは大型で伝統漁法と食文化が発達していましたが，近年は生息数が激減したことと，保全生物学的研究の成果について話されました.

講演２は,福井大学の保科英人准教授による「河川敷と国道と南方系昆虫の北進 ～ラミーカミキリを例として～」でした．南方系昆虫の北進は温暖化の進行が原因と考えられており，その拡大ルートとして河川敷や国道が利用されていることが示され，公共事業の計画には生態系の改変に関する知識が必要であることが改めて示唆されました.

講演３は，福井県自然環境課の松村俊幸主任による「福井の宝，雁が舞う里地を守るための条件」でした．福井県の雁類のおかれた厳しい現状と，これを守るための生き物ブランド米の展開,そして誰もがどこでもできる自然再生活動の取組みについて講演されました.

午前の部の終了後に昼食時間と並行して，ポスターセッションが多目的ホールで行われました．大学，高専，市民団体，行政，企業から 13 件のポスターや環境保全製品の展示があり，活発な議論や情報交換が行われました.

昼食時のポスターセッションの様子

講演４は，福井県土木部の免博彦河川課長による「足羽川における災害復旧事業と河川環境保全・再生の取組み」でした．2004 年７月の福井豪

雨によって足羽川が破堤氾濫したことを受けて実施された河川激甚災害対策特別緊急事業の内容，重要事項として実施された河川環境の保全について講演いただきました．

講演５は，国土交通省九頭竜川ダム統合管理事務所の岡村政彦所長による「真名川ダムにおけるフラッシュ放流と河川環境再生の取組み」でした．真名川ダムの流量調整が強く影響し，ダム完成後は低水路の固定化，アーマーコート化，高水敷の樹林化が顕著になったことと，フラッシュ放流により，最小限の河道改変を行うことによって河川内の撹乱の範囲を少しずつ増やして，河川環境再生を行った現地実験について講演いただきました．

講演６は，福井県土地改良事業団体連合会の鈴木正貴氏による「農業農村整備事業における生態系保全の取組み」でした．土地改良事業と生態系の保全を両立する技術の一つであるネットワークの構築手法について，主に福井県内の施工例から説明されました．また，農村の生態系保全のためには，ハード面よりも維持管理活動のソフト面を先行させる必要があるとの提言がありました．

講演７は，岐阜経済大学の森誠一教授による「越前大野市の生物多様性を水文化で守る　～住民参加によるイトヨ生息環境の保全～」でした．森先生は翌 31 日の現地見学会のルートでもある「本願清水イトヨの里」の館長も務められておられることから，大野市の水環境の保全について多くの視点から話されました．

総合討論では，座長の玉井信行先生の司会で，パネラーの辻本哲郎先生，森誠一先生，福井県自然環境課の松村俊幸氏，真名川水辺の楽校の高津琴博氏により，「九頭竜川流域の多様性　～つながりの保全・再生をめざして～」をテーマに展開されました．前半はパネラーによる事例紹介や討論がなされ，後半は前もって回収された参加者へのアンケートを基に，座長の玉井先生がフロアからの意見を取り上げて討論され，重要な議論と意見が多く出されました．その中で，「多様性のみが重要ではなく，そこに有るべきものが有ることも重要である」という意見は，つながりの保全・再生をめざすものとして印象に残りました．

総合討論の様子

最後にワークショップ副実行委員長の福井高専廣部英一教授より閉会挨拶があり，ワークショップは無事終了しました．

（３）現地見学会

まず，前日の講演でも紹介のあった足羽川激特事業実施箇所を訪ね，福井豪雨災害の復旧事業が行われた足羽川の破堤現場など約２km を歩き，護岸表面の覆土による植生の早期回復手法や，捨石や木工沈床の施工，湿地帯整備の状況など，自然環境に配慮した整備の実際を見学しました．

福井豪雨災害の足羽川の破堤現場にて

次に訪れた足羽川稲津魚道では，落差 1.7mの

床止工に設置された魚道について，施工当時の担当者から設計思想や施工上配慮した点について熱く語っていただき，現在も続くアユの遡上数調査の結果について説明して頂きました.

特別史跡の一乗谷朝倉氏遺跡では，1988 年に「ふるさとの川モデル事業」で整備され，2004 年の福井豪雨で被災・復旧した一乗谷川の緩傾斜巨石積み護岸を見学しました．また，遺跡ガイドの名調子に導かれながら，かつての越前国の中心地を巡り，朝倉氏 5 代の盛衰に思いを馳せることができました．昼食は「一乗ふるさと交流館」にて郷土料理の「呉汁」や「ごまころ」等，地元の「一乗料理クラブ」の方々による心づくしの品々を美味しく頂きました.

遺跡ガイドから唐門の説明を受ける

本願清水イトヨの里では，大野市のイトヨや清水（しょうず，湧水）の現状と保全に向けた活動について説明して頂きました．また観察コーナーでは秋の繁殖期を迎え鮮やかな婚姻色を呈したイトヨの泳ぐ様子を見ることができました.

副館長による本願清水イトヨの里の説明

九頭竜川流域防災センターと九頭竜川鳴鹿大堰では，九頭竜川扇状地の扇頂部に位置する鳴鹿大堰の構造や歴史,運用状況について説明して頂き，魚道内を側面から観察できる魚道観察室などを見学しました.

（4）おわりに

応用生態工学会としては福井県で初めての行事となった今回のワークショップでは，組織の立ち上げから始まりました．価値ある内容とすることは当然のことながら，地方では余り知られていない応用生態工学に関心を持ってもらうことが目的でもありました.幸い多くの方に参加をして頂き，地元の新聞にも掲載されましたので，技術者に加えて一般の方々にも関心を持って頂けたかもしれません．この行事を通して，九頭竜川流域の自然環境の現状と課題について認識を新たにすると共に，参加者それぞれの立場で自然環境の保全・再生に向けた今後の活動を考えるきっかけが得られたのではないかと思います.

謝辞

ワークショップの開催にあたりご協力頂きました皆様にお礼を申し上げます．共催の(財)福井県建設技術公社には当日の運営を含めて全面的なご協力を頂きました.協賛の北陸技術士懇談会,(社)福井県測量設計業協会，福井県建設コンサルタンツ協会，福井県農業土木技術研究会，及び後援の国土交通省近畿地方整備局，農林水産省北陸農政局,環境省中部地方環境事務所,福井県,福井市,大野市，(財)リバーフロント整備センター，(社)近畿建設協会，(社)日本技術士会北陸支部，(社)建設コンサルタンツ協会近畿支部,(NPO)ドラゴンリバー交流会，(NPO)福井陸水生物研究会，福井県コンクリート製品協会，日本ビオトープ管理士会福井県支部，福井新聞社，(財)福井観光コンベンション協会には，助成金支援や参加案内を積極的に行って頂きました.

河川環境の保全や再生について理解を深めた「北陸現地ワークショップｉｎ福井」＝永平寺町の県立大福井キャンパス

福井新聞

河川環境保全や再生理解深める

専門家らワークショップ

永平寺町

生態学と土木工学の専門家でつくる応用生態工学会の「第8回北陸現地ワークショップｉｎ福井」（福井新聞社後援）が30日、永平寺町の県立大福井キャンパスで開かれた。「九頭竜川流域の多様性」をテーマに、県内の河川土木に携わる関係者らが講演し、参加者は河川環境の保全や再生について理解を深めた。

同会は「人と生物の共存」「健全な生態系の持続」を目標に活動し、会員は全国で約１２００人。各地域の景観や生態を理解しようと、毎年各地でワークショップを開いており、本県では初開催となった。行政やコンサルタント会社などから約２６０人が参加した。

県土地改良事業団体連合会の鈴木正貴さんは「農業農村整備事業における生態系保全の取り組み」と題して講演。鈴木さんは「田園地帯を生息地とする生き物が減少している」と主張。その原因を「生物を無視したほ場整備事業によって、水田と農業用排水路間で生物が移動する経路を分断したから」と分析、生態系保全を考慮した整備事業の重要性を訴えた。

また県自然環境課の松村俊幸主任は、三方五湖周辺で3年前から行われている無農薬農法を紹介し、冬に水を張った田んぼの面積を拡大するにつれてコハクチョウの飛来数が年々増加していると説明した。「無農薬農法は生き物の生活場所の提供だけでなく、農家にとってはブランド米の生産、消費者にとっては食の安全を提供するという、三者の安心した生活が実現できる自然再生活動だ」と話した。

「北陸現地ワークショップ in 福井」掲載記事

7　近藤会長の瑞宝重光章 受章について

近藤会長が，2009 年秋の叙勲受章者に選ばれ，瑞宝重光章を授与されました．心よりお祝い申し上げます．

瑞宝重光章とは，公務等を長年にわたり従事，成果を挙げ，国家または公共に対し功労された方に対して国が授ける勲章です．

今後，益々のご活躍を期待いたします．

8　編集後記･事務局から

＜今後の予定＞

12. 2　第 42 回幹事会（委員会報告，今後の検討課題討議）
12. 17 第 51 回理事会（委員会･幹事会報告，検討課題審議）
12. 18 ニュースレター46 号発行（第 13 回総会報告，埼玉大会報告など）
12. 23第３回　応用生態工学会ＣＯＰ１０対応ワーキング，「「生物多様性保全に向けた応用生態工学からのアプローチ」国際ワークショップ実行委員会（仮称）」設立会
12 月　会誌 12 巻 2 号発行
2 月　ニュースレター47 号発行（役員会報告，行事報告，平成 22 年度会費請求など）
3 月　第 41 回幹事会，第 50 回理事会

＜事務局の近況＞

全国大会である埼玉大会や，各地域で企画・実施されたシンポジウムや現地ワークショップも盛況の内に無事終了しました．事前の企画・準備や当日の手配・連絡まで，積極的に活動・支援頂いた皆様に，あらためてお礼を申し上げます．

埼玉大会や地域の企画は，どれも熱意あふれる充実したものでしたが，広島，松山，大阪では現地を実際に見た後にシンポジウムや後援・討論会が行われ，参加者の理解・認識がより深まる企画になっていると感じました．

来年度の全国大会は，札幌での開催となり，平成 22 年 9 月 21 日（火）～24 日（金）の 4 日間（21 日：エクスカーション，24 日：総会・公開シンポジウム）で行われる予定です．現在，札幌大会実行委員会（委員長：中村太士理事）が組織され，企画・準備が進んでいます．こちらは，次号ニュースレター(2 月発行)でご紹介致します．

また，応用生態工学会では，2010 年 10 月に名古屋で開催される「生物多様性条約 第 10 回締約国会議（COP10）」に向けて，COP10 対応ワーキンググループ（責任者：辻本哲郎理事）を組織し活動しています．COP10 対応 WG は，生態学と工学の融合を目指す学際研究の場としての責任から，「生物多様性」に向けた学会としての考え方を取りまとめ，世に問うことを目的とし，国際シンポジウムも平成 22 年 5 月に開催する予定です．

ECSE NAGOYA COP10を応援します

今後とも学会の活性化，活発な活動をより一層進めて参りますので，会員の皆様のご支援・ご協力の程，よろしくお願いいたします．

（事務局：仮谷伏竜）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

［平成 21 年 12 月 1 日現在会員数］

名誉会員：　4 名
正会員　：1,100 名
学生会員：　110 名　　合計 1,214 名
賛助会員：　33 法人（50 口）